



作られた序者：『春雨物語』と『ぬば玉の巻』に即して（小特集：近世文芸の作者の`姿勢(ポーズ)`：序文を手掛かりとして）

飯倉，洋一

(Citation)

國文論叢別冊, 1:10-16

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483223>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483223>



■小特集 近世文芸の作者の「姿勢」——序文を手掛かりとして

作られた序者

——『春雨物語』と『ぬば玉の巻』に即して

飯倉 洋一

はじめに

書誌学的な意味での「序」は、書物の冒頭か末尾にあって、その書物の成り立ちについて記したものと見えよう。形式的には、

① 「序」であることが明記されている。

② 文末に署名がある。

③ その部分が「前付」「後付」として独立している。

以上の①②③を全て満たしていなくとも、少なくともひとつを満たしていなくては「序」とは言えないだろう。一方で、「序」の撰者が本文を書いた当人であっても、別人であっても構わない。前者を「自序」と呼び、後者を「他序」と称するのである。出版された「近世小説」と通常呼び慣わされているテキストにおける「序」は、本文の一部を成すとは言えない。

二〇二二年八月二十七日に神戸大学国語国文学会の主催で行われたシンポジウム「近世俗文芸の作者の『姿勢』——序文を手掛かりとして——」では、右のような書誌学的な意味での、主として近世後期俗文芸の「序文」を手掛かりとして、作者の姿勢のあり方

を議論する想定であったと思う。シンポジウムの趣旨文では、それを考える際に「序文」の虚構性が重要とされ、私の『春雨物語』「序文考」（『秋成考』、二〇〇五年）もその例として引かれた。しかしながら、冒頭の書誌学的な「序」の意味を踏まえれば、本文の冒頭部で、全体の趣旨や本文執筆の契機を叙述しているようないわゆる序文は、書誌学的な意味での「序」と同一とは限らない。それをきちんと識別しておくことが重要だと考えられる。

たとえば、中森康之によつて「序文」と称された（二〇二二年度日本近世文学会春季大会発表『笈の小文』『おくのほそ道』序文考）『奥の細道』の冒頭文や、『徒然草』の「序段」と称されている文は、書誌学的には「序」ということはできない。

一方、書誌学的な意味での「序」を有する『ぬば玉の巻』は、捏造された古典本文に注を施した「無腸」の署名を備えており、本とシンポジウムのテーマを考えるに相応しいテキストである。

本稿では、秋成のふたつのテキスト『春雨物語』と『ぬば玉の巻』から、「序」の虚構性と「序者」の姿勢を考察する。

『春雨物語』の序者

まず『春雨物語』のいわゆる序文を考えてみる。長くはないので、富岡本の全文を挙げておこう。なお表記は句読点、濁点を補い、分かりやすく改めた部分がある。

はるさめけふ幾日、しづかにておもしろ。れいの筆研とう出たれど、思めぐらすに、いふべき事もなし。物がたりざまのまねびは、うひ事也。されど、おのが世の山がつめきたるには、何をかかたり出ん。むかし此頃の事どもも、人に欺かれしを、我又いつはりと知らで、人をあざむく。よしやよし、寓ごとかたりつづけて、ふみとおしいただかする人もあればとて、物いひつづければ、猶春さめはふるふる。

難解とされてきた文章であるので、解釈も掲げておこう。異論のある部分もあるが、本稿ではその議論はせず、私の解釈を示す。

春雨が今日でもう何日降り続いているか、静かで風趣がある。いつものように（歌を詠もうと）筆硯を取り出して思い巡らしてみようけれども、別に春雨については感興を催さない。（だけれど、このつれづれの雨の中だから）、物語体をまねて何かかいてみようか。初めての事なのだが。でも、私のような山がつめた者には、（他に）何を語り出すことがあるうか。昔そしてこのころの事なども人にだまされたけれど、私もまたそれを偽りとは知らないということにして、（それを書くことにし

よう）、（私もまた）人を偽ることになるけれども。まあいいか、そらごとを語り続けて立派な本だと有り難がらせている御仁もいることだし。そう思つて書き続けていると、まだ春雨はしとしとと降り続いているのである。

『春雨物語』諸本のうち、序の付されている富岡本（自筆）、文化五年本（転写本）、天理冊子本（自筆）、羽倉本（自筆）それぞれ「序文」の本文を比較すると、細部に異同はあるが、述べている内容については大差がない。あたりまえのことだが、その都度春雨が降っていたわけではない。少なくとも春雨の降り続く中で、ひとり何を書き出そうか案じている「序者」を、読者は秋成だと思ふかもしれないが、実際は秋成によつて作られた人物、長島弘明の言葉を借りると「変装」した秋成である（長島弘明「変装する〈作者〉——上田秋成の小説を例として——」（ハルオ・シラネ他編『作者』とは何か 継承・占有・共同性』岩波書店、二〇二一年三月）。「序者」を实体としての秋成と安易に同一視するべきではない。

『春雨物語』は自筆写本と転写本あわせて数本が伝わるが、「序文」を備えたテキストはいずれも「序」であることは明記されず、序末に署名もない（ただ、羽倉本では「春雨物がたり」という内題の前にあるから、書誌学的な「序文」の体裁を十分に備えている）。前述のように、「序者」を秋成と同一視して読むのは普通だろうし、秋成もそれを想定しつつ、「序者」を作っているのだらう。

『春雨物語』の「序文」には署名はないので、読者はこれを自序

と解し、作者秋成のメッセージをここに読み取ろうとする。しかし、「序者」が、実体としての秋成だとすれば、「物がたりざまのまねびはうひ事也」「おのが世の山がつめきたる」が問題となる。

「物がたりざまのまねび」とは、秋成も参加していた伴蒿蹊の「和文の会」で行われていた和文実作のひとつの試み「擬物語語体」の和語といつてよい。たとえば「閑田文章」巻四「文」に「孟子東廓播間之章二体」とあるうちのひとつが「擬物語語体」と題されている。同時代には本居宣長の『手枕』が「かの（源氏）物語のふりをまねびて」創作されたものであり、村田春海『琴後集』所収の和文「河づらなる家に郭公を聞くといふことを題にて物語ぶみのさまにならへる文」もそれである。だが、秋成は「物がたりざまのまねび」を経験しており、むしろ得意であるため、「序者」と「実体としての秋成」とは違うな、と読者も首をひねるところである。『春雨物語』を「うひ事」の所業と見れば、あえて草子地的な語りを露出するようなところが見られるなど、なるほど見ようによつては初心者だな、と思われる部分もある（拙稿「血かたびら」の語りについて）『秋成考』翰林書房、二〇〇五年）。

「おのが世の山がつめきたる」については、〈和歌を日常的に詠むが、今はその気にならない風雅人〉が、自分の心理的境遇を「山がつめきたる」と表現していると解せる。「山がつ」ではなく、「山がつめく」なので、これは「序者」の一時的境遇とみるべきだろう。つまり「山がつめく」は、「和歌を詠むような状況ではない」ことであり、それゆえに「物がたりざまのまねび」のほかに、今の自分が「何をかかたり出ん」と言うのであって、これは和歌的境遇から、より格の低い物語の書き手的境遇へと、いわば落ちぶ

れた「序者」像を描いているのである。作者秋成のポーズというよりも、「序者の創造」である。とはいえ、秋成は、自分自身をベースにおいてこの「序者」を作っている。そういう意味では、長島弘明の「変装」の語が相応しいかもしれない。

さて、実体としての秋成と「序者」とは重なる部分もある。ひとつは、冒頭「はるさめけふ幾日、しづかにておもしろ。れいの筆研とう出たれど、思めぐらすに、いふべき事もなし」の部分である。谷川家旧蔵（現天理大学附属天理図書館所蔵）の『春雨梅花歌文卷』は、秋成の失明を救った眼科医谷川兄弟へ謝礼のために与えたと思われる十八メートルに及ぶ歌文卷であるが、その冒頭が、次のような前書に続く「春雨」の三十余首連詠であった。

春さめしづかにふりておもしろ。雨の歌軒の玉水とかぞへも
せで、あしたれいの重檀の手習に、清うこそあらね

言うまでもなく、『春雨物語』の「序文」冒頭と似ている。また秋成には、「けふ幾日晴ぬ雲間に長閑なる日影をこめて春雨ぞ降」（架蔵秋成和歌短冊）と、『春雨物語』冒頭の「けふ幾日」とシンクロする和歌もある。『春雨物語』の読者にとって、『春雨物語』の「序文」の書き出しを読む限り、「序者」は実体としての歌人秋成と見えるはずである。

もうひとつは「序文」の後半にある、「むかし此の頃の事どもも人に欺かれしは」の部分である。実体としての秋成を「序者」と想定すれば、美山靖（新潮日本古典集成『春雨物語 書初機嫌海』頭注）が言うように、この部分は秋成論敵である本居宣長の『古

事記伝』を想定していると読むことができる。あるいは秋成の自説である『日本書紀』改竄説（安々言 など）を踏まえているとも読める。「序者」は秋成の実像と重なってゆくのである。

ところで、「序文」は、『徒然草』序段を意識しているだろう。筆の赴くままに、心に映ることを書き綴るという体である。そして「春雨」という現象は、「徒然」と親和性がある。

宝暦二（一七五二）年刊の『当世下手談義』序には「少し小臂を春雨の、徒然なくさむ伽にもやと、下手談義とは名付けらし」とあり、天保元年自序を有する『春雨譚』（天明七（一七八七）年刊『宿直文』改題本）序文には、「春の雨いとしげしげしくあやにく降りて徒然なる折ふし」と言うように。降り続く春雨という環境は、つまらない談義や、故事雑談などで暇つぶしする、和歌詠作の格の高い場とは違う、気軽な〈咄〉や〈談義〉や〈長物がたり〉にもまた相応しい場なのである。「春雨物語」という標題の「物語」は、源氏「物語」のようなジャンルとしての物語（物がたりにさま）ではなく、春雨の徒然の中で、詠作に向かえない「序者」（＝書き手）がひとりで書き綴る長談義（長物語）という意味でとらえうる。そうとらえれば、「歌のほまれ」という物語性のない随筆的作品が一部を占めていてもなんら違和感はないのである。

つまり、「序者」は、実体としての秋成を想起させつつも、実体と一致しない虚像である。

秋成がこのような「序者」（書き手）を作ったのはなぜか。『春雨物語』執筆時、京都に住んで十年以上経った秋成は、「歌道の達人」（『西福寺簿霊帳』）と目されるくらい、歌人としての地位を確立していた。文芸ジャンルとして物語は和歌より低い位置にあり、

名をあらわにしないという伝統が平安時代から連綿と続く。秋成は、自分であつて自分ではない「序者」＝物語には初心の作者を、歌人秋成とは別人格として作り上げたのだ。

富岡本には署名の痕跡がない。文化五年本の巻末には「瑞龍山下の老隱戯書 于時歳七十五」と署名するが、「老隱」はペンネームではないだろう。没する一月前に記した羽倉本奥書には、「浪花人」と名乗るものの、やはり顕名ではない。『春雨物語』の「書き手」は、ペンネームさえない匿名の「書き手」である。

戯作者の見せる作者のポーズとは異なり、『春雨物語』の「序者」（書き手）は、秋成が創作した、秋成に似ているが秋成とは別の人格である。

『ぬば玉の巻』の序者

一方、書誌学的な意味での「序」を有する『ぬば玉の巻』は、捏造された古典本文に注を施した「無腸」の署名を備えており、シンボジウムのテーマを考えるに相応しいテキストであった。「無腸」とは言うまでもなく秋成の号である。『ぬば玉の巻』は、安永八（一七七九）年の成立。転写本でのみ伝来する。連歌師牡丹花肖伯の門人で、『源氏物語』を生涯に二十四部写したと伝えられる堺の連歌師宗椿が、夢で明石の浦に遊び、柿本人麻呂に会って、『源氏物語』や和歌に関する談義を聞かされるという設定のもとに、秋成が自己の物語論、『源氏物語』論「ほのほのとあかしの浦の朝霧に」の和歌の作者論議などを、登場人物の人麻呂に託して述べた書である。秋成の物語論が開陳されたテキストではあるが、それは登場人物を通して述べられるので、いわゆる「寓言」

の中でも、私にいう〈学説寓言〉である（飯倉洋一「大江文坡と源氏物語秘伝——〈学説寓言〉としての『怪談とのみ袋』冒頭話——」『語文』第八四・八五輯、二〇〇六年二月）。『源氏物語』に關しての言説については紀行文『秋山記』に同内容の論がある。序者「無腸」によれば、無腸が城崎での湯治中に、隣室の宿泊客の持ってきた冊子に、求められて本文に傍注を付し、題名（「ぬば玉の巻」）を与えたという体裁になっている。

『ぬば玉の巻』は元々出版される予定があつたらしい。

大阪本屋仲間記録の「新板願、出印形帳」によれば、『源氏野真玉ノ巻』という題名で、作者を「泉州堺 宗椿」として、天明元年十一月に開板出願されている。実際に出版された形跡はないものの、次に挙げる無腸の序文は版本化を前提に書かれたものと考えてよい。序者無腸は、注者でもあり、『ぬば玉の巻』の最終形態を完成した執筆主体である。

『ぬば玉の巻』の枠組みには、入れ子状に三つの言説主体がある。外側から序者かつ注者の無腸、手記の書き手である宗椿、宗椿の夢の中に現れて発言する人麻呂である。これらの入れ子構造は、作者秋成が「ぬば玉の巻」という物語を作る際に用意した仕掛けである。

次に『ぬば玉の巻』序の全文を掲げる。

むかしいづみの国さかひの津に、宗椿といふ人ありけり。
光源氏の物語を廿四部までうつし、あさがほの巻に筆をとどめられしといふ事、人あまねくかたりつたへて、世のめざまし草なりけり。

安永八年の秋、たちまのゆあみに出たちて、かしこに日ごろふるほど、壁のとなりによどれる人の、日々にいきかひして物がたりするつひでに、この冊子をたづさへ来たる。よみて見れば、むかしの人の夢物がたりを、やがての寝ざめにかいしるしたる筆の跡なりけり。

いとめづらしうて、「いかでかかるまめごとの、いままうづもれて、世の人見しらざりけん」と、とどめおきて、たびねの枕がみのからたひ人になぐさむを、このふみぬしのいへる、「このふみのころばへ、世の人のいへるにたがひて、いとありがたしと見るものから、ただ詞の古めいたるがおぼろげにて、いたづらに見すぐす所々もすくなからず。おのれが為めやすからんしるべせよ」といふ。いとわづらはしとは聞なすもの、もとむるままに、真名にはかんなをそへ、仮名にはまんなをうゑなしつつして、かつことのころをもはしはしときなすやうにて、是がかりてをつぐなひ侍りぬ。

猶もとめらるるは、「このふみうは書をしるさず。をりをり呼わづらひぬ。此ついでにかいつけてよ」と。「されば、むかしの人のこのころをしらねば、すずろわげせんは、このふみのおもはんことをもおぼしなすにぞ、いかであらたには物すべき。ただはじめのこと葉を指て、『ぬば玉の巻』と呼ばや」といへば、「まことにさるためしにしへのふみにおほかり。むべごと」とてもさりぬ。こやいにしへをしのびて打なげかんの、うつしとどめて世にもひろむべきを、さる人はまれなりや、あらずや。

それの年の神奈月のはじめ、此やどりにてしるしあたへぬ。

一般的に版本の序文の書き手は自序であれ他序であれ、とりあえずは実体的な存在として措定されている。それゆえに、その姿勢（ポーズ）をそこから読み取ろうという問題意識が次に生じるのである。『ぬば玉の巻』の序は、注者の自序として読まれるが、その注釈の対象は、『伊勢物語』や『源氏物語』のような古典ではなく、秋成によって捏造された手記である。しかも実在した連歌師宗椿を手記の書き手として設定しているので、擬作もしくは偽作であり、そこに注を施すという奇怪な本の作り方をしているのである。

序によれば、安永八年の秋、城崎に湯治のため滞在していたころ、隣室の宿泊者と往き来しているうちに、隣人が一冊の本を持ち来った。それは昔の人の夢語りを目覚めてすぐに書き記したもので、序者無腸は興味を持ち自分のところに留め置いた。すると隣人は、言葉が古くて読みにくく、飛ばしてしまうところもある。傍注を施して読みやすくしてほしいと頼んできた。煩わしく思ったが要望に従って、漢字に振り仮名を付したり、仮名に漢字を付したり、所々には語の意味も記して、題号まで与えて、もっと借り賃に代えたというのである。

宗椿の夢語りの記の中に出てくる登場人物（人麻呂）の言説は、秋成「秋山記」に登場する法師の言説と重なるので、宗椿の手記というのは秋成の捏造であり、それをあたかも実在した手記であるかのように書いている「序者」＝「無腸」も実体としての秋成ではなく、作られた「序者」である。しかし『春雨物語』同様、

秋成は自身の実像と重なるように、しかも「無腸」と名乗る「序者」＝注者を作りあげた。

本書は「足利の末」（本文傍注）に書かれたものに、「安永八年」（序）の時点で注を施しており、序文・本文・傍注の全体としての作品（テクスト）は時間的な奥行を持つ事になった。序に隣人のことばとして「詞の古めいたるがおぼろげにて」とあり、本文の「今の世のありさま」（書き手は宗椿）には「足利ノ世ノ末ヲ云ナリ」と無腸の注のあることから、読者は否応なく足利時代末から安永までの時間の奥行をテキストに感じる。傍注と序が付されたことで、本文が〈歴史的存在〉＝古典になるのである。同時にそれは、手記の書き手である宗椿を作中人物化し、「手記」の物語化を促進することにもなる。

『ぬば玉の巻』の「序文」には署名があり、本文との境界も明確であって、書誌学的にも序と言えるものである。「序者」を実体としての秋成だと読者が理解するのは当然であるが、秋成はなぜそのように読者の誤読を誘うかのような仕掛けを施したのだろうか。注釈の対象である宗椿の手記が本物であると思わせるためであるのか、知的遊戯としての偽書を作り、偽書とわかって読者と共に楽しむためであるのか。にわかに判断しがたいが、写本のひとつ京大本『ぬば玉の記』は、中世の歌学書・日記・物語類とともに綴じられていて、宗椿の著述であることを信じた者がいた可能性を示しているのである。

おわりに

『春雨物語』と『ぬば玉の巻』における「序者」は、どちらも実

体としての秋成を想起させながらも、現実の秋成と一致はしない、秋成によって作られた「序者」であったが、それぞれに作られた事情は異なっていた。しかし実体としての秋成がポーズを取っているのではなく、演技しているのでもなく、別の人格を作っている点においては共通しているのである。

（いいくら よういち／大阪大学名誉教授）